

「鎮魂」語の近代 — 「鎮魂」語疑義考 その1 —

坂本 要[※]

<はじめに>

現在私達は「鎮魂」というと死者を悼むことで「鎮魂の思い・鎮魂の悲しみ」などとしてこの言葉を使用している。もう少し限定すると戦死を含む不慮の死をこうむった人の霊を悼むことに使う。そのような人の霊がこの世にとどまって、浮かばれない、仏教的に言えば往生できないので、魂を鎮めてあの世に送るという靈魂観にささえられてこの言葉がある。平安時代はじめに政治的に抹殺された人も含め、これらの霊は怨霊となり、この怨霊は鎮魂されて御霊として祀られる。以上のようなことがらが一般的な理解であろうか。

しかし古代史や民俗学を少し学んだ人であると、このような鎮魂の解釈は異なる。鎮魂は宮中儀礼で毎年の新嘗祭や天皇の代替わりである踐祚大嘗祭に先立つ儀礼、鎮魂祭・鎮魂の義の鎮魂であり死者への鎮魂とは異なる。鎮魂は漢語であるが、日本語・和語では「たまふり・たましずめ」といわれ遊離している、もしくは遊離しようとする魂（たま・この場合天皇霊か）を身体に戻し、（これをしずめるといい、かためる、しっかりと身につけるの意味とする）魂をゆさ振って元気にするための儀礼とされる。括弧でくくったのは、この儀礼については諸説あるからである。ともかくこの宮中鎮魂祭の鎮魂が本義であるとするのは折口信夫をはじめとする古代研究者の定見であろう。さらにこの説は天鈿女命の岩戸神楽伝説やこれを冬から春への季節祭に淵源をもとめる説となっている。この天皇霊への魂振りがなぜ死者の鎮魂に結びついたかは怨霊・御霊という觀念が古代末から中世に登場したからと説明されている。五来重はここに遊部^{あそびべ}という職能集団を介在させて歴史的経緯の説明をしている。

しかしこのような通説や専門家の説にもいくつか問題点がある。一つは鎮魂という語の使われ方で、現在私達が考えている鎮魂と宮中鎮魂祭はとりあえず意味が大きく異なる（研究者はそれを歴史的推移の中で説明しようとしているのだが）。また昨今の靖国神社問題で神社側は「鎮魂」の語を使わずに「慰霊」「招魂」の語が使用する。このようにただかこの100年の間で「鎮魂」の語が激しい変化をこうむっているのがわかる。これは研究者の間でもそうで、鎮魂の語を使った人と使わなかった人に分かれる。（学説史を含みこのことは「鎮魂」語疑義考 その2に詳述する。近世の国学者の鎮魂の研究は伴信友の『鎮魂論』にみるように宮中鎮魂の儀礼・行法が主であるが、さらに遡って現在刊行されている中世の古記録・典籍の一応の索引（東大史料編纂室所蔵索引等）を引いても宮中鎮魂祭以外での「鎮魂」の用例は見つかっていない。（「——を鎮める。——を鎮撫す。」はある）この問題はさらに精査しなければならないで

※筑波学院大学情報学部教授

あろう。筆者は念仏芸能の研究を主にしている関係上この問題は看過するわけにはいかない。怨霊・御霊・物の怪の問題も怨霊から御霊へと簡単に移行しないことがいわれている。怨霊・御霊にたいする仏教側の対応も新たな視点として提起されている¹。

今回はとりあえず近代の中で「鎮魂」の語用をとりあげることで、鎮魂論の相対化をはかりたいと思っている。

1、〈鎮魂の語用をめぐる〉

岩波書店の『広辞苑』第一版（1955年刊）と現行の第七版（2008年刊）の「鎮魂」の意味を調べると、意味が変わっている。正しくいうと意味が加わっている。第一版では「魂をおちつけしずめること。たましずめ。」に「②死者の魂をなぐさめしずめること。」が加わっている。関連項目の「鎮魂帰心」「鎮魂曲」「鎮魂祭」は順番が代わり「鎮魂帰心」「鎮魂祭」「鎮魂ミサ曲」となり、「鎮魂曲」は「鎮魂ミサ曲」になっている。関連項目の説明は変わっていない。今後の論の展開でそれぞれの項目の説明が必要になるので、第三版以降の説明を記す。

- A「鎮魂」①魂をおちつけしずめること。たましずめ。②死者の魂をなぐさめしずめること。
- B「鎮魂帰心」精神をしずめて無念無想となり、一切を捧げて神明に帰依すること。
- C「鎮魂祭」①たましずめのまつり。②神葬で死者の魂を鎮める祭典。
- D「鎮魂ミサ曲」キリスト教で死者の魂をしずめるために捧げるミサの音楽。レクイエム。鎮魂曲

この分類が以下の分析の指標となるのでA～Dの記号を付けておこう。

この『広辞苑』でC—①のたましずめのまつり。これは宮中での鎮魂祭をさす。Bの「鎮魂帰心」というのは鎮魂行法といわれるもので、明治時代以降本田親徳（ちかあつ）や大本教が古神道の行法として伝えたものである。Dの「鎮魂ミサ曲」二版までは「鎮魂曲」となっているが、レクイエムは鎮魂ミサの典礼に演奏される曲としたからであろう（後述）。

さらに調べていくとこの改変は1983年『広辞苑』第三版からである。第二版増補版が1976年刊なのでこの間に記述が変わった。この間にA—②の意味が加わったのは、それなりの社会背景があったと思われる。現在このような語の使用の頻出度は正確には測れないが、2007年に国会図書館所蔵の近代図書を「近代デジタルライブラリー」として語ごとの検索可能に²、また2009年には読売新聞が明治6年からの新聞記事・掲載広告を「ヨミダス」としてデジタル化をして細かい項目や語の検索が可能になった。他の新聞社もデジタル化を進め、語の検索化を進めている。このことにより近代における語の使用の変遷、その裏にある意味の変化を探ることが、ある程度可能になった。現在使用されている語が過去にはどうだったか、別の意味ではなかったのかというようなことがわかってくる。「鎮魂」の語がこのような適例で、ここ百年「鎮魂」の意味が変わっているのである。

大正11年刊の落合直文の『日本大辞典言泉』には「鎮魂一魂をおちつけ鎮むること。たましずめ。鎮魂の式。鎮魂の祭。→次条に同じ」次条は「鎮魂祭——、魂鎮（タマシズメ）の祭

二、神葬に死者の魂をしずめまつる意にて行ふ儀式。」とある。「鎮魂」の文例として『神皇正統記』の「天皇、鎮魂の瑞宝なりしかば、その祭を始められにき」を引いていることから宮中の鎮魂祭のことを指すと考えられる。したがって「鎮魂の式・鎮魂の祭・魂鎮（タマシズメ）」は宮中の鎮魂祭のことで、神葬祭の鎮魂儀式の項目が新しく、この二つの意味が『言泉』に載っていることがわかる。『広辞苑』分類ではC-①とC-②にあたる。

2、＜日清戦争まで＞

このことを念頭に置いて「ヨミダス」で「鎮魂」の語を探ってみよう。「ヨミダス」ほどではないが、見出し語で朝日新聞も引けるので合わせて検討する。

まず明治9年（1886）6月20日相模大山社務所の宣伝広告に「大山鎮魂祭」7月27日から8月17日まで「信者一般の身体堅固の為毎日社頭にて執行し悪疫除御守供物参拝人に限り授与す此旨広告す」とある。大山神社にはこの時期権田直助がいて新しい行事を作った³。

次にでてくるのは明治21年（1888）4月7日で「伊国先帝の鎮魂祭」という見出しで、イタリアの先帝ウキトルエマニニエル（ヴィクトルエマニユエル）陛下の十回忌がローマで行われたという記事である。これはキリスト教のミサを鎮魂祭と訳したのか、新聞記事の訳としては初出である。

明治27年（1894）10月21日の朝日新聞に「故下山熊喜氏の鎮魂祭」の見出しがある。広島発の記事として平壤で戦死した中国新聞記者下山熊喜氏の鎮魂祭を広島的神道分局で行うという記事である。戦死なので鎮魂としたか、神道式葬儀であるようなので鎮魂祭としたかいずれかであろう。読売新聞にも同様の記事が載る。

次は明治28年（1895）1月3日の日清戦争関連記事で「金州城南鎮魂祭」と「旅順に於る混成旅団の鎮魂祭」という見出しが並ぶ。その下の段の見出しは「蘇家屯に於て騎兵大隊の招魂祭」となっている。「金州城南鎮魂祭」の記事をよく見ると「（前略）中央に祭壇を築き招魂の碑と書したる大方柱を立て種々の供物いかめしく備え各隊より奉納せし慰魂の旗数旒あり（後略）」とある。鎮魂・招魂・慰魂の三語が混用されている。西村明によれば「慰霊」の語が使われるのは、日清戦争直後の明治30年頃としているのとは一致する。「鎮魂」の語は同明治28年10月17日に「騎兵隊戦死者鎮魂祭」同12月5日「鎮魂祭と冬牡丹」⁴といういずれも日清戦争戦死者関連記事で使われている。戦死者に鎮魂語を用いる最後の記事は明治39年（1906）1月20日及び8月28日の朝日新聞のもので、日清戦争の金州南山攻囲軍の偉業を伝えるため戦死者の鎮魂碑を建て、そこを巡航したとする内容である。

その後「鎮魂」の語をしばらく見ないが明治42年（1909）4月19日の記事に「スチーヴンス氏の鎮魂祭」の見出しがある。サンフランシスコで不慮の刃（やいば）に弊（たお）れたる氏の靈魂を撫（なぐさ）めんため追悼鎮魂祭を築地聖三一大聖堂於いて開かれたり」とあり、ミサを鎮魂祭と訳したか、不慮の死者追悼を鎮魂としたかいずれかである。

少しもどろが朝日新聞の記事が、明治36年（1903）7月30日の記事にローマ法王鎮魂祭の記事

が朝日新聞・読売新聞の両紙にある。これは外国人の葬式に鎮魂を用いた例である。

ここまでで見るとはじめに鎮魂の語が相模大山の例でみられるが、注3で述べたように権田直助の用語とみられる明治期にはこの一例だけで、これはA—①に該当しよう。他は戦死者の鎮魂の例でA—②にあたる。鎮魂ミサを鎮魂祭と訳した例が散見するが広辞苑分類のDにあたる。

3、＜日露戦争と天皇祭祀＞

興味を引くのは日露戦争以降「戦死者」に対して「鎮魂」の語はなく、ほとんどは「慰霊」になってしまう。「ヨミダス」では明治42年9月24日横浜伊勢山大神宮で西南・日清・日露戦役者慰霊。同11月29日旅順で日露戦役者2万2719人を慰霊 明治43年津で戊辰戦争以来の招魂祭。以降慰霊・弔魂・招魂・忠魂の記事が多数ある。

「慰霊」「招魂」の語については近年靖国神社をめぐる研究で多くの実証的研究や論考が多出しており、ここでは「鎮魂」の語の使用に限って話しを進める⁵。

大江志乃夫の『靖国神社』によれば「日清戦争後と日露戦争後とは、靖国神社にたいする国家一特に軍の扱いが大きくちがってくる」とある。天皇の靖国神社「親拝」と凱旋観兵式参加部隊の靖国神社参拝がおこなわれるようになったことで、軍の参拝は明治39年（1906）からである⁶。

宮中鎮魂祭の記事は大阪朝日新聞が明治12年（1879）と16年（1884）にすでに載せているが、その後しばらく記事にはなく、明治36年11月23日の朝日新聞の記事に宮中鎮魂祭の記事が載る。新嘗祭の鎮魂祭である読売新聞の明治42年11月14日の記事に「22日に宮中にて鎮魂祭が行われる」との記事がでる。大正元年（1912）8月18日新帝践祚・鎮魂式の記事。大正4年（1914）11月13日14日に大嘗祭の鎮魂祭執行の記事。大正6年（1916）11月23日宮中鎮魂祭の記事。大正8年（1918）11月23日宮中鎮魂祭の記事。明治45年明治天皇がなくなり、大正天皇の践祚大嘗祭の記事が出るに前後して、戦死者や不慮の死や悪疫鎮魂の語は記事から消えてしまう。この状態は戦後まで続く。天皇と靖国神社の関係が強まるにしたがって鎮魂という言葉は天皇の宮中祭祀に使われるもので、靖国神社に祀られている戦死者には使われなくなる。したがって戦後昭和30年（1955）に発刊された初版『広辞苑』鎮魂にはA—②「死者の霊をなぐさめること」はなく、この事項は慰霊・招魂の項に載っている⁷。

4、＜大本教事件と鎮魂行法＞

次に鎮魂の語が出てくるのは大正9年（1920）の大本教の記事である。読売新聞で6月に「謎の綾部」として連載記事が載り、「鎮魂帰神」の法の怪しさをとりあげている。「鎮魂」の原義は『令義解』に「離遊の運魂を招きて身体の中府に鎮む」とあるように離れた魂を再び身体に戻すということであるが、近代に起こった様々な鎮魂法を取り入れたものに各種の「古神道」がある。本田親徳の鎮魂石という石を前にして自らの魂を鎮める。川面凡児の鳥船という船を

こぐ動作から六段階の身体動作でみずからの魂をしずめていく等々様々な身体技法をそれぞれの教祖が編み出していくが、その典拠ははっきりしない⁸。むしろメインは婦神という、憑霊行為にあったようでその前段の心身を落ち着ける意味で鎮魂の語を使用している。大本教の鎮魂作法もそのような意味で外魂を憑着させる行法くらいの意味とされる⁹。

大本教は世直しと称し「大正維新」「大正十年立て替え」を標榜したことにより、不敬罪と新聞紙法違反により、大正10年（1921）出口王三郎を始めとする教団幹部の逮捕と綾部の本殿の破壊を受ける。これが第一次大本事件でその後も昭和10年（1935）年不敬罪と治安維持法違反で第二次大本事件がおこり、新聞紙上をにぎわす。新聞に「鎮魂」の語が毎年の新嘗祭と昭和3年（1928）の大嘗祭の宮中鎮魂祭以外の用語で出てくるのは、この「鎮魂婦神」の意である。この大正10年前後から欧米で起こった「靈性」運動（スピリチュアリズム）の影響を受けて⁸日本では心霊研究が流行り、日本でも広告に「心霊」や「鎮魂婦神」の語が散見するようになる⁹。『広辞苑』にでているDの「鎮魂婦神」とはこのことで、大正から戦前に見出せる言葉である。

5、＜神葬祭と鎮魂＞

『広辞苑』C-②の神葬祭の意味で鎮魂祭がのっているが、新聞紙上でこの語を使用している例は意外に少ないように見受けられる。例としては先に記した明治27年（1894）10月21日の朝日読売両紙に載った「故下山熊吉の鎮魂祭」の記事であるが、これも新聞記者ながら戦死としたため鎮魂なのか、広島で神道分局でおこなった葬式なので鎮魂としたのかは判断できない。神葬祭は幕末の国学運動より強まり、従来の仏教式葬式に反発して広がりを見せたが、明治初年頃はまだキリスト教を弾圧する施策をとっていたため宗門改めの必要から時の明治政府が神葬には消極的であった。維新直後の宗教政策は二転三転するが明治4年（1871）の教部省時代には神葬の奨励策もだしている。そうこうするうちに明治政府は近代国家として信教の自由と政教分離の建前を採らざるを得なくなった。しかし神道をもって国民教化をはかろうとする政府は神社非宗教論の立場にたち、明治15年（1882）神官の祭礼は可として葬儀不関与の通達をだした。しかし神官の反発もあり明治17年（1884）には神官の自葬許可を出したので神葬の前面禁止はまぬがれ、地方によっては個人で神葬を行う家もあった。以上が神葬の顛末であるが¹²、その後葬祭がまったく自由になるのは戦後で、それまで神葬祭は特殊と見られていた。また神葬祭の儀礼からは鎮魂を意味することはなく、魂を幽界に移す遷霊の儀とそれに先立つ忌みの祓いの儀が中心になる¹³。

したがって神葬祭では「鎮魂」の語はあまり使用しないのであるが、国学に靈魂や幽冥界のことを大きく扱うことをもたらした平田篤胤の著には、この語を見出せる。『靈能眞柱（たまのみはしら）』では墓所を説明して「さて如此上代より墓處はその骸を隠し、はたその魂を鎮める科にかまふるもの故」「上古より墓處は魂を鎮留むる科にかまふる物なることを思はれしかば¹⁴」とあり「墓は魂を鎮めるところ」という觀念があらわれている。神葬祭で「魂を鎮める」という明確な意識があったのかはわからないが、葬儀一般を鎮魂とした例は明治6年（1873）の十一

兼題にある。「十一兼題」とは宗教政策を国民教化の一環として教部省を設け、その教導職の指針を定めた十一の項目のことである。その中に「鎮魂」という項目が入っているが、ただこのときの教部省の大教宣布運動は神道・仏教を包括したもので教導職には神官も僧侶も入っている¹⁵。ということで、『広辞苑』C-②や大正11年の『言泉』にもっている「神葬で死者を鎮める祭典」「神葬にて死者の魂をしずめまつる意にて行ふ儀式」であるということは確認できない。

6、〈鎮魂曲〉

興味を引くのは昭和8年にブラームスのドイツ鎮魂曲が日比谷公会堂で初演され、人気を博し、昭和13年にヴェルディ・ケルビーニ・モーツァルトとあいついで鎮魂曲演奏の記事がのっている。戦中の重苦しい雰囲気をもたらした流行であろうか。『広辞苑』のDにあたる。欧米の葬儀を鎮魂祭と訳すのは明治期から散見する。レクイエムを鎮魂曲と訳すのには異論もある¹⁶。ここでは『音楽大事典』（平凡社1983）土屋吉正の文を紹介する。「レクイエムーキリスト教における死者のためのミサ典礼のこと、またはその式文に歌う音楽のことで、レクイエム（「安息」の意）は冒頭の語からきた名。死者が天国に迎え入れられるように神に祈る典礼であって、死者の霊に直接働きかけるものではなく、鎮魂曲・鎮魂ミサなどの呼称は適当ではない。」レクイエムの文句は魂を鎮めるのではなく天国への救済を神に祈る文句である。いずれにしろ鎮魂は外国人の葬式の意に使った。

7、〈戦後の鎮魂〉

戦後さらに鎮魂の語の使われ方は変容をし続ける。

昭和に入ってから戦前の新聞記事には、宮中祭祀・大本教事件以外には「鎮魂」の語はみいだせない。頻繁に「慰霊・招魂・忠魂」の語が戦死者儀礼・戦死者供養に使われる¹⁷。

戦後はほとんどが「慰霊」である。その後「鎮魂」の語が使われたのは昭和50年頃である。まとまった記事としては昭和45年（1970）6月23日の朝日新聞文化欄に京大日本史の上田正昭が第一次安保反対闘争の中で死亡した樺美智子氏の10周年忌を傷んで「鎮魂の原点」と題する長文の論を載せている。内容は樺美智子10周年忌を初めに語り、古代のたまふり、たましずめを論じている。樺美智子氏の死については事件の起こった昭和35年の記事では「慰霊」の語が、昭和45年の記事では「追悼」の語が使用されていて、「鎮魂」の語は上田氏の論が初めてである。戦後、死者を悼む意味の「鎮魂」は詩や文学に散見するが、新聞記事としては、これより少し前の読売新聞の昭和45年3月1日の記事に八甲田山の雪中行軍の死に対して「69年目の鎮魂歌」の記事が見え、このころから死者に対して「鎮魂」の語が増える。

また昭和46年（1971）11月13日岡野弘彦「怨霊鎮魂の心」昭和47年（1972）6月梅原猛の『隠された十字架―法隆寺論』の記事で「法隆寺は怨霊をとじこめるための鎮魂の寺」説の紹介。昭和48年（1973）2月11日桜井徳太郎が「怨霊の二つの型」と題して靖国神社の慰霊を批判し、

怨霊鎮魂の儀を述べている。この時期になると怨霊・鎮魂はブームの感があり、研究書等でもこの語が多出する。『広辞苑』にA-②の「死者の魂をなぐさめしずめること」という項目が昭和48年（1983）から加わる。

8、＜書誌一覧からみる鎮魂の語＞

この「鎮魂」の語の急激な増加は国会図書館の書誌一覧を年次ごとに追っていくことによっても確かめられる。明治大正期の鎮魂を冠した本は4冊、いずれも前述した近代古神道鎮魂行法の本である¹⁸。昭和20年まででも5冊、傾向は同じで、天理教に入信していた作家芹沢光治朗の小説『鎮魂歌』が目をはひく。

昭和20年以降は鎮魂関連図書で再刊復刊を含むので正確な数とは言えないが、出版件数の目安になる。

1945～50	5冊	1975～80	49冊
1955～60	9冊	1981～85	105冊
1960～65	7冊	1986～90	101冊
1966～70	21冊	1991～95	149冊
1971～75	39冊	1996～2000	98冊

一覧にすると上記のようになるが、1970年（昭和45年）前後から増えだして、80年代に爆発的に鎮魂に関する本が増えるのが分かる。

9、＜鎮魂ブーム＞

「鎮魂」の語の使用が急に増える理由はいくつか考えられる。明治期に散見していた「鎮魂」の語は日露戦争を境に「招魂」「慰霊」に語を変え、「鎮魂」は宮中鎮魂祭と古神道系の鎮魂行法にのみ用いられた。（キリスト教の鎮魂ミサ・鎮魂曲は散見する）戦後もこの状態がしばらく続くが戦後25年たち戦死者の扱いが相対化する。一つは靖国問題で昭和44年（1969）自民党は「靖国神社法案」を提出し、靖国神社の国家管理をめざすが、賛否両論の中で昭和48年（1973）に廃案となってしまふ。この間国民は靖国神社の実態を知り、靖国神社の「慰霊」「招魂」の語に絶対性をもたなくなる。1973年の桜井徳太郎のように、靖国神社は戦死者を怨霊鎮護の民俗的霊魂観にもとづくものではないかの説がでる。靖国神社にとってこれは一番困る考えで、怨霊鎮護というおどろおどろしい観念に基づくということでは崇敬に導けない。靖国神社は招魂社として出発し、戦死者を核として慰霊・顕彰をするというのが神社の主張である¹⁹。

次に天皇祭祀である新嘗祭・大嘗祭における鎮魂祭・鎮魂の儀がニュースにのらなくなったため、一般の国民には宮中鎮魂祭は忘れられてしまった。鎮魂の本義はここにあるはずであるが、鎮魂が死者供養の意味に用いられてくる。キリスト教の葬儀を鎮魂祭とし、戦中の鎮魂曲の流行がこの地慣らしをしたとも考えられる。戦後散見された詩や文学には戦死者への鎮魂の語がもちいられていた。70年以降も戦死者への鎮魂出版物は増える。70～80年にかけての鎮魂関

連出版物には個別部隊や地方別の慰霊出版が多い。

さらに70年前後におこったカウンターカルチャーのムーブメントがある。68年のパリの五月革命に始まる学生運動はその政治主張だけでなく、いままでの文化に対する対抗文化運動でもあった。日本でも既成の文化学問にたいする疑問から、近代社会に隠されていた文化の評価があった。土着・情念・怨霊・憑依現象等反非合理的なものに目がむかった²⁰。怨霊・御霊のブームはそこにあった。このブームは妖怪・怪異ブームとして現在まで続いている。

<小結>

明治初期の新聞記事にはいろいろな意味で「鎮魂」は使われていた。疫神鎮めであったり、欧米の葬儀を鎮魂祭といたり、神道式葬儀も鎮魂祭とあったようだ。大きいのは日清戦争までの戦死者に鎮魂という言葉を使っていた。日露戦争を境に靖国神社への国家参与が強まると、戦死者に対して慰霊・招魂の言葉を使うようになる。大正3年(1914)の大正天皇の大嘗祭の儀の前後から鎮魂は宮中鎮魂祭のみに用いられるようになる。例外は不敬罪に問われた大本教の鎮魂行法の鎮魂である。一方クラシックの鎮魂曲(レクイエム)から葬送を鎮魂ととらえる観念は広がっていたようである。鎮魂の語が爆発的に増えるのは1970年以降であるが、それには靖国神社の相対化・宮中鎮魂祭の関心のうすれ、逆に戦死者の慰霊行為を鎮魂ととらえるようになり、戦死者へ「鎮魂」を冠した本が多く出版された。さらに70年代の学生運動から派生した反近代非合理主義への関心は怨念・怨霊・御霊ブームとなり、現在の妖怪・怪異ブームにつながって鎮魂の語が多用されるようになった。これと同じようなことは鎮魂研究史でも起こり、70年を境に鎮魂を関した研究も増える。

注

¹ 最近の動向は山田雄司「怨霊研究の諸問題」小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』2010せりか書房・『跋扈する怨霊』2007吉川弘文館・『崇徳院怨霊の研究』2001思文閣出版・大江篤『日本古代の神と霊』2007臨川書店・『特集古代に見る御霊と信仰 国文学 解釈と鑑賞』No.802 1998-3 至文堂

² 「慰霊」の語の検索は西村明が「近代デジタルライブラリー」で試みている。「慰霊再考—サイズメとフルイの視点から—」

³ 権田直助(1809-1887)は幕末から明治最期に活躍した平田派の国学者で明治維新後大山阿夫利の祠官になり国学神道の教化、教育に務めた。

⁴ 2に同じ。

⁵ 村上重良『慰霊と招魂』1974岩波書店 大江志乃夫『靖国神社』1984岩波書店 西村明『戦後日本と戦争死者慰霊』2006有志舎 『明治聖徳記念学会紀要復刊44号 特集「日本人の靈魂観と慰霊」』2007明治聖徳記念学会 『慰霊と顕彰の間—近代日本の戦死者観をめぐって—』国学院大学研究開発センター企画編集2008 錦正社(近現代日本の慰霊・追悼・顕彰に関する主要研究

文献目録掲載) 『霊魂・慰霊・顕彰』国学院大学研究開発センター企画編集2010 錦正社

⁶ 大江志乃夫『靖国神社』 p 130～131

⁷ 初版『広辞苑』慰霊—死者の靈魂をなぐさめること。慰霊祭—死者の靈魂をなぐさめるために行う祭典。招魂—①昔、中国で人の死んだ時、屋上に上がって死者の魂をまねきかえらせたこと。②死者の霊を招いて祭ること。招魂祭—③死者の霊を祭る儀式、招魂社の祭典 招魂社—招魂社・護国社・靖国神社の説明が続く。

以上であるが、招魂の話は儒教儀礼が始まりであることがわかる。

⁸ 本田親徳（ほんだちかあつ1822～1889）幕末から明治にかけて活躍した古神道を試みた霊能者。鎮魂・帰神・太占をもって古神道の復興とした。大本教の出口王仁三郎は本田の鎮魂法を習ったという。川面凡児（かわつらぼんじ1862～1922）幕末から昭和にかけて独特の鎮魂の禊行を行い、宗教団体を組織した。本田とは系統の異なる鎮魂法をとる。古来からの鎮魂法は宮中鎮魂祭の鎮魂法と奈良石上神社に伝わる鎮魂法などいくつかの系統がある。

⁹ 津城寛文『鎮魂行法論—近代神道世界の霊魂論と身体論—』春秋社1990 p164～182 近代神道の鎮魂法の知識はこの著によるところが大きい。

¹⁰ 津城寛文『<霊>の探求—近代スピリチュアリズムと宗教学—』春秋社2005

¹¹ 朝日新聞大正8年（1919）8月18日版広告記事

友清天行 実験新著『神傳実験 鎮魂帰神の原理及应用』徳田九郎親徳翁開拓 御穂神社々司長澤雄楯推薦 定価金参圓 静岡市外北安東汲古書屋発行 宣伝文に「言々句々驚異の大文字、一切極意解放、修行容易、皇国吉傳の秘法悉く此一卷に結集す、読みて実効を挙げ難き世間の流行霊術書と同一視する勿れ、初版売切次第絶版とす。

※徳田親徳 長澤雄楯（かつたて）の名があがっている。長澤雄楯は静岡県三保（御穂と記している）神社社掌で鎮魂行法を行う。著者の友清天行は本名友清欽真（ともきよよしさね）で心霊研究の第一人者浅野和三郎について「鎮魂」を学ぶ。この本が皇国日本に伝わったものであることと、流行の霊術（心霊術）と違うと謳っていることが興味深い。不二龍彦『日本神人伝』1995学研 津城寛文1990

¹² 阪本是丸「近代神葬祭の歴史と墓地の問題」『神葬祭総合大事典』雄山閣出版2010 村上重良『国家神道』岩波書店1970

¹³ 神葬祭の儀礼は加藤隆久編『神葬祭大事典』2003戎光祥出版『神葬祭総合大事典』雄山閣出版2010 に詳しい。遷行の儀の中に「神依り板（かみよりいた）」を霊璽（位牌にあたるもの）にかざして、これを打ち警蹕（けいひつ）をもって遷霊する。神依り板は和琴の代わりに用いたもので、宮中鎮魂祭では和琴をかき鳴らし憑霊鎮魂（たまふり）をした。したがってこれを鎮魂儀礼の痕跡と考えることもできる。

¹⁴ 神道体系 論説編26復古神道（4）平田篤胤 p 270 p272

¹⁵ 十一兼題とは「神徳皇恩・人魂不死・天神造化・顕幽分界・愛国・神祭・鎮魂・君臣・父子・夫婦・大祓い」の十一でこれには平田派復古神道の思想が大きな比重を占めていたとされる。

村上重良『国家神道』 p108。ただ「鎮魂」が復古神道のものか仏教のものかは不明。

¹⁶ 山根銀二『岩波小辞典 音楽』1955「レクイエムー鎮魂曲と訳されているが適訳とはいえない。」

¹⁷ 英霊・顕彰はまた論があるので、ここでは扱わない。文献については注3を参照

¹⁸ 近代に行った古い神道の復活であるのでこの語を使用した。明治22年 本田瑞穂『本教要義』
禊教会本院

大正8年 友清九吾『鎮魂婦神の原理及应用』汲古書屋

大正9年 友清九吾『鎮魂婦神の極意』汲古書屋

大正13年神乃道講義所『神乃道鎮魂気吹法』神乃道講義所自宗会堂

¹⁹ 戦死者のみでなくA級戦犯者を殉難者として祀っている等は靖国問題として解決していない。靖国神社では以上の理由から鎮魂社の名は使っていないが、境内には「鎮霊社」がある。鎮霊社は昭和40年(1965)は靖国神社本殿合祀者以外の戦没者戦死社を祀る目的で筑波藤鷹宮司の発案で立てられた。靖国神社の案内には「戦争靖国神社本殿に祀られていない方々の御霊と世界各国すべての戦死者や戦争で亡くなられた方々の霊が祀られている」とある。御霊は「みたま」と読む。田中丸克彦『さまよえる英霊たち』2002 柏書房 より詳しくは秦郁彦「靖国神社鎮霊社のミステリー」『文芸春秋』平成13年(2001)11月号 『靖国神社の祭神たち』新潮社2010

²⁰ 谷川健一『魔の系譜』1971紀伊国屋書店 1969年1月より雑誌『伝統と現代』伝統と現代社に連載したものをもとにしており、このブームの端緒を飾るもので、第一章「怨念の序章」から始まる。谷川健一は1984年の講談社文庫版のまえがきに「情念の葛藤劇を描いた。」「1970年前後には若者たちの間には情念の復権が強く叫ばれていた。」「そのような学園紛争の渦中にあった若者たちにも本書は読まれていたようである。」と述べている。

他に『日本人の宗教。情念の世界』佼成出版1972 山折哲雄『日本人の靈魂観—鎮魂と禁欲の精神史—』1976 河出書房新社 桜井徳太郎『靈魂観の系譜』筑摩書房1977 守屋毅編『芸能と鎮魂』春秋社1988 鳥居明雄『鎮魂の中世』ペリかん社1988 等多数ある。

参考文献

大江篤『日本古代の神と霊』2007

大江志乃夫『靖国神社』1984 岩波書店

小野和輝監修『神葬祭総合大事典』雄山閣出版 2010

加藤隆久編『神葬祭大事典』2003 戎光祥出版

小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』2010 せりか書房

五来重「遊部考」『仏教文学研究 第一集』1962 法蔵館

阪本是丸「近代神葬祭の歴史と墓地の問題」加藤隆久編『神葬祭大事典』2003 戎光祥出版

津城寛文『鎮魂行法論—近代神道世界の靈魂論と身体論—』春秋社 1990

津城寛文『<霊>の探求—近代スピリチュアリズムと宗教学—』春秋社 2005

- 田中丸克彦『さまよえる英霊たち』2002 柏書房
 谷川健一『魔の系譜』1971 紀伊国屋書店→1984 講談社文庫
 西村明『戦後日本と戦争死者慰霊』2006 有志舎
 西村明「慰霊再考—シズメとフルイの視点から—」『慰霊と顕彰の間—近代日本の戦死者観をめぐって—』国学院大学研究開発センター企画編集 2008 錦正社
 秦郁彦「靖国神社鎮霊社のミステリー」『文芸春秋』平成13年11月号 2001 文芸春秋社
 秦郁彦『靖国神社の祭神たち』2010 新潮社
 不二龍彦『日本神人伝』1995 学研
 村上重良『国家神道』岩波書店 1970
 山田雄司『跋扈する怨霊』2007 吉川弘文館
 山田雄司『崇徳院怨霊の研究』2001 思文閣出版

新刊紹介

菅原 壽清 著

『アジア山地社会の民俗信仰と仏教
 —タイ北部と雲南の宗教人類学的研究—』

本書は、木曾御岳信仰の研究の第一人者である著者のおよそ20年にわたる中国雲南、白族・ハニ族、タイ、アカ族の調査行の報告からなる。二部構成をとり、第一部「タイ北部と中国雲南における民俗信仰」では、第一章：タイ北部と雲南西双版纳—アカの人びと、第二章：雲南元陽—ハニの人びと 二部「大理白族の本主信仰と仏教」第一章：本主信仰の成立と仏教 第二章：本主廟に祀られた神々の神統とその構造 第三章：本主信仰を支える祭祀組織 第四章：大理白族の葬送儀礼 第五章：大理白族の巫師、の章立てで実際現地の子に入って年中行事・人生儀礼など民俗調査を行い、その民俗誌を踏まえ各論が展開される。

筆者の関心は、仏教伝播以前の民俗信仰

の中心をシャーマニズムと捉え、仏教との相互関係から、仏教と融合した社会、受容しながらも独自の信仰を保持する社会、民俗信仰のみを中心とした社会など、「仏教半ば」→白族、「仏教以前」→ハニ族の宗教生活の実態を可能な限り現地調査し、日本の複合化した宗教構造を逆照射するところにある。伝統的な生活要素を残す山村部の事例報告を基調とするが、文化大革命や近年の観光開発など社会変化の影響への目配りもされている。いずれにしる仏教民俗という宗教形態の有りかたを比較の指標とする意欲的な試みの書であり、一読を勧めたい。

(佐野賢治)

岩田書院 2010年11月 A5判 339頁